



「命を？」

「そうだ。君も自分の兄弟が何をしているのか知っているだろう」

「兄は…自衛隊を除隊した後、暫く音信が途絶えて…その後は…」

「フリーランスの傭兵になった」

加夏子が驚いた様子で真山を、そして殉を見た。

「傭兵って、お金で雇われて戦争するっていうアレ？」

殉は何も言わなかった。

「それって人殺しじゃん！ ジュンは何とも思わないの！？ アナタのお兄さん、人を殺してお金を稼いでるんだよっ！」

「…」

「ジュン！！」

「…」

「清水さん、彼の入院費用をあの男が負担していて、その金は奴が汚い仕事で稼いだものだとしても、それは彼のせいじゃ無い」

「でも…でもさ！…」

「知ってた。兄さんは心を隠したりはしなかったから」

顔を起こし、真山の方を真っ直ぐに見つめるようにしながら殉が口を開いた。

「会う度に悲鳴が聞こえた。ああ、また沢山、人が死んだんだなって。恐ろしい光景が見える時もあった。飛び散った手足…潰れた身体…いろんなモノを垂れ流しながら助けを求める人…みんな兄さんが見てきたものだ。でも僕は兄さんを止めたりしなかった」

「なんで？ なんで止めてくれって言わなかったの？！」

「それが兄さんの選んだ道だから」

キッパリと殉が言い放った。

「烈兄さんは、闘うことでしか生きられなかった。あのまま日本に居たら絶対、兄さんは狂っていた。無差別に誰かを襲っていたかも知れない。でもそんな事は出来なかった…兄さんには無抵抗な人間を殺すなんて事は死んでも出来なかったんだ！ だから！！…」

「君はお兄さんを信じているんだね」

抑揚の無い、でも何処か優しげな声で真山が言った。

「彼は傭兵になる前、僕と同じSSだった。そこで犯罪者狩りをしていた。彼もかつてはこの国の平和を影から支えていたんだ。でも退職後、国の組織に雇われていた時期があってね。彼のせいで亡くなった女性が居たんだ。僕は彼女の警護担当、そして北山さんは、僕の依頼で彼女の死の真相を探っていたんだよ」

ふうと一つ息を漏らす。

「そして、僕や北山さんは君の兄さんと闘ったって訳さ。そしてまだ、決着は着いていない」

彼は君を追ってここに来ている筈だ。

真山の言葉は断言だった。

喫茶店での4人の話し合いは結局、それから1時間とかからなかった。

告白と確認と、情報交換。

4人はそれぞれの想いを抱きながら店を出、別れていった。

◇

なんでいわなかった？

滝のような汗を拭きながら、北山は隣りを歩く真山に聞いた。

「いずれは判る事じゃねえか。早い方が本人達のためだと思うがね」

「北さんは何で言わなかったんですか？」

「おれは、アレだ…タイミングっていうのか、それが何ともなあ…」

「じゃあ、僕もそれです」

「ああ？」

「『タイミングが悪い』、そういう事にしときましょうよ」

「お前おちよくってんのか」

「誰を？」

「北山探偵事務所代表の俺さまを、だ！」

「今はK & M探偵社ですよ。すぐ忘れるんだから」

「あのかなあ」

こめかみに青筋を立ててきた北山に向かい、足を止めた真山が真顔で言った。

「下手に動揺させるより今のままの方が、彼らと鴉が接触する確率は高くなります。ルアーより生き餌のほうが餌としちゃ食いがいいじゃないですか」

「お前、そんな事を考えてたのか？」

真山の言葉に、北山の青筋が引っ込んだ。

「俺はてっきり…」

「あの二人に同情した、と？」

真山が足下に視線を落とした。

「いずれ判る事なら、自分達で真実を知ればいい。泣くのも絶望するのも、それは彼ら自身が決める事です。僕は鴉が憎い。彼らの置かれた立場と僕の想いは、所詮相入れないものでしかないんです」

「真山…」

「それに奴との事は、僕らの個人的問題です。今回の依頼とは関係無い。人捜しには目玉は多い方が有利じゃないですか」

再び顔を上げた真山の声はサッパリとしていた。

「さあ、こっちも早々に引き上げて作戦を立て直しましょう。早く見つけないとアイツも困るだろうし」

「アイツって、あいつか？」

「そ、依頼主」

ひとつ振り返り、行きましょうかと北山を促して真山は陽の落ち始めた道をまた歩き始めた。

◇

「あのオヤジ、やな感じだったな。ブスッとっ放しだったし」

殉の代わりに汗だくになって車椅子を押してくれた北山に、加夏子は相変わらず悪態をついていた。

「そんな事言うなよ。僕の具合を心配して車椅子押すの代わってくれたじゃないか。たぶん、あの人なりのお詫びのつもりだったのさ」

「それより、別れ際に真山さんと何話してたの？」

「うん、チョット、ね」

今夜の宿。ひなびた旅館。

玄関で加夏子をおぶり部屋へ向かう殉は無表情だった。

◇

部屋は六畳ほどのこじんまりしたものだった。宿泊客も彼らのほかには見当たらなかった。
衣笠恵美子の実家とは比ぶべくもなかったが、宿の主人の人当たりの良さと、素泊まりの客にわざわざ出してくれた盆の上の和菓子が、へとへと二人を癒してくれた。

「潮風。大好きなんだ、私」

開け放った縁側に横座りした加夏子が、暗くなった瀬戸内の海を眺めながら風に髪をなびかせていた。
遠くに漁火がふたつ見える。

「女将さん、いかにもあの旦那さんの奥さんって感じだったね」

手探りでお茶をいれながら殉が答える。
少ない手荷物は部屋の隅に纏め、二人共、備え付けの浴衣に着替えていた。
食事は持ち込みの弁当だったが、入浴は交代で済ませていた。
旅館の主人は、年若く不自由な二人を心配し親身になって世話してくれていた。

「お風呂どうしようかって心配してたんだ。でも女将さんがいてくれたんで助かった」

やや小太りの女将は、足の不自由な彼女をたすき掛けの勇ましい姿で浴場までおぶってゆき、大丈夫だよと言いながら身体を綺麗に洗ってくれたのだ。

ウチにもアンタとおない歳位の娘がいてねえ
歌手になるって東京に行ったきりだけど、ちゃんと便りは寄越してくれるんですよ
誰に似たんだか頑固者で、有名になるまで帰って来ないなんて言ってたケド、毎月、仕送りしてくるのよ
そんなんせんでもええのに

眼鏡を曇らせながら一所懸命洗ってくれた女将が、そんな事を話してくれたのだと加夏子は殉に言った。

「いい女将さんで幸せ者だなあ、娘さんもお主人も」

「ジュンは思い出す？ ご両親のこと」

「顔も見たことないよ」

加夏子が黙った。

「生まれつき目が見えないってのも悪い事ばかりじゃないな。昔を思い出して悲しくなったりしないし」

「そんな…」

「僕の肉親は兄さんだけだった。昔も、今も」

両腕で這いずりながら加夏子が殉のそばまで来た。

飛びかかるように殉に抱きつく。

不意をくらって殉は畳の上に押し倒された。

「みて。わたしをみて、ジュン」

「見えないよ、僕には」

加夏子に組み敷かれた殉は、横を向いて顔をそらせた。

「見えなくても見えるの！！」

柔らかい、重い身体がドサリと落ちてきて、殉の頭が細い腕に抱えられた。
胸に押しつけられた二つのふくらみが、彼の心臓を痛い程締め付けた。

唇が重なり、柔らかなものが歯の間から侵入してくる。
殉は何も考えず、それを迎えた。

おずおずと触れ合っていた舌が、やがて2匹の蛇のようにうねり、互いに絡まり合う。

鼻息だけが小さな部屋に響く。

身体を入れ換え、殉が加夏子を組み敷いた。貪りあう二つの唇は離れない。

背中をまさぐっていた殉の手が、華奢な肩を辿って胸の膨らみに触れた。

ビクリと動きが止まる。

ゆっくりと唇を、身体を離れた。

息を弾ませながら加夏子を見下ろす形になった。

眉間に皺をよせ、思うように走れないマラソンランナーのような顔をした殉の頬を、加夏子の掌が下から優しく撫でた。

「…ゴメン…」

「どうして謝るの」

頬の手が殉の右手をとり、自分の頬へと触れさせた。

額から鼻梁、瞼。

「判るでしょ」

「知ってる」

「心の中の影じゃない、これが、わたし」

顎から首筋を通り、そっと左の胸に重ねた。

「私、いつだってドキドキしてるんだよ。ジュンと一緒にの時はいつも。何処でも行く。あなたと一緒になら、どこまででも行ける。一人じゃない、ジュンも、ワタシも」

「カナ…」

.....

タンタン！！

扉を叩く音に、二人はバネ人形のように飛び起きた。

おでこと顎がその拍子にけっこうな勢いでぶつかった。

「ポットのお湯を換えに…アラ？ どうしたん？」

部屋の真ん中で、顔をしかめて額や顎をさすっている二人を見た女将がニヤリと笑った。

「ハハア〜、不粋な真似しちゃったみたいね。いいからいいから、換えのポットはここに置いていくわね、じゃ、お邪魔サマア〜」

意味深な笑みを浮かべ、やけにゆっくりと扉を閉めて女将が出ていった。

顔を見合わせた二人は、どちらともなく小さく吹き出して、やがてカラカラと笑いだした。

◇

港。

女と、数人の男。

薄灯りの下で、年長らしい男に女が分厚い封筒を渡していた。

「じゃ、頼んだわよ」

「ヘィ。お嬢さんには世話なっとりますし、こんなにもらっちゃあ申し訳ねえくらいで」

「気持ちよ。気をつけて。特に探偵の方は」

「此処あ俺達の庭ですぜ、余所モンに好き勝手にゃあさせねえ」

ドスの利いた声で男が答える。

黒い群れが輪になって封筒の中身を確認始めた脇で、女はひとつ石ころを蹴った。

ポチャン

べた凧の海に、波紋が広がってゆく。

あと少し

邪魔はさせない

女…衣笠恵美子が、刺すような目で沖を睨んだ。